

49 ガスパール・ボアアン “Theatrum anatomicum” について (2)

——“Anatomica corporis virilis et mvliebris historia”
(1597) との比較検討

月 澤 美代子

ガスパール・ボアアン (Gaspard Bauhin, 1560—1624) の “Theatrum anatomicum” は、ハーヴェイ、デカルト、あるいは、ヨハネス・レメリンなどの同時代人に大きな影響を与えた解剖学教科書であり、十六世紀後半から十七世紀初頭におけるアナトミアの特徴を最もあらわす解剖学書とされてきた。

前報においては、このボアアンの “Theatrum anatomicum” の初版 (1605) と第二版 (1621) の序文の比較検討を紹介した。今回は、この “Theatrum anatomicum” に先立って出版された “Anatomica corporis virilis et mvliebris historia” (1597) の「前書」^{*)} との比較検討を紹介し、“Theatrum anatomicum” 「序文」の位置づけを、より明らかにしたい。

バーゼルにおけるボアアンの最初の公開解剖は、一五八一年二月に行われた。ボアアンの最初の解剖学テキストである “De corporis humani partibus externis” は、一五八八年の公開解剖の後、「学生の求めに応じて」出版されたという。この後、一五九〇年に出版された梗概的な解剖学教科書 “De corporis humani fabrica: Libri III” を訂正・拡大する形で出版されたのが “Anatomica corporis virilis et mvliebris historia” (1597) である。“Theatrum anatomicum” は、これをさらに訂正・拡大する形で出版された。

しかし、“Theatrum anatomicum” (初版、1605) が、小型本とはいえ、本文だけで二二八二ページを有するのに対し、この “Anatomica corporis virilis et mvliebris historia” (1597) は、二〇八ページという小冊であり、公開解剖参加学生への手引き書という当初の形を残しているものと考えられる。

“Theatrum anatomicum” の「序文」の基本的な姿勢は、次の三点において、初版と第二版とで共通している。

1、ポーアンの医学上の知識とともにユマニスム的教養の深さを示す序文であること。

2、ギリシャ古典とキリスト教思想の調停が行われていること。

「神の創造せし、神の似姿としての人間」、「自然の驚異」、「神の奇蹟としての人体を識ることは、神御自身を識ることに通ずる」という、きわめてキリスト教的な発想を、本来、異教徒の書物であるギリシャ古典からの引用をつなげて説明し、人体解剖という営為を正当化していく姿勢が顕著に見られる。

3、「驚嘆すべきもの」、「全ての奇蹟の中の奇蹟」、「無限な完全さをもった驚嘆すべきファブリカ」といったコトバが随所に散りばめられ、肯定的に称賛すべきものとしての人体という姿勢が顕著であること。

すなわち、「Theatrum anatomicum」の「序文」はこの書物の中で展開されるアナトミアを、宗教的・思想的背景の中に位置づけ、その正当性を広く社会に向けて説明する機能をもった。

これに対し、「Anatomica corporis virilis et mvliebris

historia” (1597) の「前書き」は、「神による人間の創造」から書き出され、ポーアンの敬虔な宗教心を随所に示しているとはいえ、その内容は、この書の出版の経緯の説明から始まり、医療のための人体の知識の必要性、ギリシャ古典からとられた普遍的人体を探究する方法の説明、ガレノス説に対する自己の態度の明示など、主として医療関係者に向けたと思われるものから成っている。

すなわち、「Theatrum anatomicum」 “Anatomica corporis virilis et mvliebris historia” (1597) は、共に解剖学教科書という形式をとっているとはいえ、そのもつ対社会的な意味あいには、大きく異なっていたと考えられる。

(順天堂大学医学部医史学研究室)